

令和6年度

帝塚山学院泉ヶ丘中学校  
入学者選抜試験問題

1次A入試

国語

(試験時間 60分)

受験番号	
------	--

□ 小学生の「銀花」は、父「尚孝」が実家の醤油蔵の① 当主を継ぐことになったため、母「美乃里」と三人で住んでいた大阪から、「多鶴子（銀花の祖母）」のいる奈良へ引越すことになった。次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

父は② 大原に付いて蔵の仕事を学びはじめた。慣れない仕事が辛いらしく愚痴をこぼしにくる。

「③ 3 榴棒で ④ 4 味噌をかき混ぜるんやけどな、ただ混ぜているようで、意外と難しいんや。深い桶の底にまんべんなく空気を送り込まなあかんのや。混ぜるんやない。突く感じや、結構力がある」

「大変やね。でも、お父さんは子供の頃、お手伝いせえへんかったん？」

父は決して母に愚痴をこぼさない。相手はいつも銀花だ。理由は簡単。「美乃里さんを心配させたくない」からだ。

「蔵の仕事がいやで逃げ回って、ずっと絵を描いてたなあ」腕を大きさにさすりながら父が顔をしかめた。「まだ腕が痺れる気がする。なんてたって、お父さん、絵筆より重い物、持ったことないんや」

半分冗談半分本気という感じた。① 本気で返すのが怖いので冗談で返すことにした。

「それやったら、いつそ絵筆にお醤油つけて絵を描いたら？」

すると、父が声を立てて笑った。いつもどおりの明るい父でほっとした。

「それ、ええなあ。醤油絵か。売れるかもしれん」父はそこで声をひそめた。「実はな、お父さん、この前、雑誌社に絵を送ったんや。自信作や」

「ほんと？ すごい。早く返事が来たらええね」

「ああ。② 醤油造りはそれまでの辛抱や」

父の毎日は忙しい。蔵で醤油を造るだけが仕事ではない。注文を取ったり、③ 5 得意先を回ったり、県内の同業者の集まりに出たり、と毎日あちこち飛び回っている。たまに家にいるときでも、蔵の横にある事務所にこもりつきりで多鶴子に

④ 6 帳簿の付け方を習っていた。絵なんか描く暇がない。父の気持ちを思うとかわいそうで③ 胸が痛くなった。

—— 実は、お父さんは醤油造る気なんか全然ないんや。

あの夜の父の言葉が胸の奥にわだかまっている。父には絵を描いて欲しい。でも、当主としての責任もある。このままだとどちらも上手く行かなくなるような気がする。父はどれだけ傷つくだらう。多鶴子はどれだけ怒るだらう。不安でたまらなく

なると銀花は柿の木の前でお祈りをした。

「<sup>⑦</sup>座敷童の神様。お父さんを守って下さい。うまく醤油が造れますように。お父さんの絵が売れますように。私は一生柿は食べませんから」

心配の種はもう一つある。母のことだ。<sup>④</sup>母と多鶴子はまるで違っていた。その差が一番現れたのは台所仕事だ。

多鶴子は長年、蔵の仕事をしながら家族と<sup>⑧</sup>蔵人の食事の用意をしてきたそう。毎朝大量の米を炊き、手早く魚を焼き、煮物、汁物を作らなければならなかった。もちろん味は悪くはなく決して手抜きでもなかったが、働く人の腹を手つ取り早く満たすという実用性が最優先された。蔵人がいなくなった今でもその考え方は変わらない。食事を楽しもうという考えはかけらもなかった。

一方、母の頭には実用などというものは存在しなかった。母が料理で大切にするのは「美味しくて素敵で父が喜ぶかどうか」だ。時間も材料費もまるで気にしない。大阪にいた頃はしよっちゅう一日がかりで手の込んだ料理を作っていた。

蔵に来た当初、多鶴子は母に台所を任せた。すると、母は朝食にトーストと紅茶を用意した。そして、夕食にも洋食を作った。ローストポークにリンゴと生姜のソースがかかったもの、オニオンスープ、白身魚と野菜のマリネ。全部父の好物だ。デザートには桃の風味のババロアもあった。母は午後いっぱい使って料理を作った。とても美味しくて父も銀花も大喜びした。<sup>⑨</sup>桜子などは「こう言ったほどだ。」

「お母さんの料理よりよっぽど美味しい」

次の日の朝もパンだった。夕食はふりふりの海老の入った濃厚なクリームグラタン、卵の黄身が鮮やかなミモザサラダ、トマトのスープ、それにプリンだった。みんな苦しくなるまで食べて満足したが多鶴子は一人<sup>⑩</sup>仏頂面だった。

「美乃里さん。明日の夜は和食にして。歳取ると脂っこい料理は胃にもたれるんよ」

多鶴子が言うのと、翌日母は<sup>⑪</sup>懷石料理のようなものをこしらえた。海老の真丈、ぐじの塩焼き、鱧の落とし、夏野菜の炊き合わせ、手作りの胡麻豆腐、などなどだ。デザートは竹に流した水ようかんは絶品だった。

どれも美味しくてみなお代わりをして平らげた。そんな食事が一週間ほど続いたある朝とうとう多鶴子の堪忍袋の緒が切れた。

「<sup>⑫</sup>醤油蔵がパンなんか食べてどうするんやよ。朝は炊きたての御飯に決まってる。蔵で働く人間がこんなペラペラのパン一

枚では無理や。かと思たら夜は毎晩ご馳走続き。美乃里さんに任せたらお金も時間もいくらあっても足りへんわ」

母が（ 1 ）としてうつむく。慌てて父が取りなした。

「お母さん、美乃里さんの料理は美味しいやろ。なんでそんなこと言うんや」

「お金と時間掛けたら美味しい物ができるのは当たり前。でも、うちは醤油蔵や。そんな贅沢してられへん。もういい。明日からは私が作るから、美乃里さんは手伝いだけで結構」

その言葉通り次の日から多鶴子が台所を仕切るようになった。母は多鶴子の手伝いをするようになったが、そうなることすこしも料理ができなくなった。厳しい多鶴子が怖くて臆してしまったからだ。

「すみません、すみません」

そればかりを繰り返して母は手伝いもせず逃げ回るようになった。代わりに銀花が手伝うのだが、日に日に多鶴子の苛立ちが増していくのがわかった。

そして、とうとう事件が起こった。多鶴子と銀花が朝食の支度でなくてこ舞いしていたのに、母はなにもせず（ 2 ）していた。堪忍袋の緒が切れた多鶴子が家中に響くほどの声で母を叱りつけた。

「美乃里さん、あんた、いい加減にして。ちよつとは手伝おうと思えへんの？」

母が（ 3 ）と泣きだした。食卓に着いたばかりの銀花は慌てて立ち上がった。

「私がやりますから」

「銀花。あんたに言うてるんやない」

（ 4 ）と言われ、思わず身がすくんだ。中途半端な姿勢のまま動けなくなる。すると、父が助けてくれた。

「なあ、お母さん。お母さんにはお母さんの流儀があるように、美乃里さんには美乃里さんの流儀があるんや。押しつけたらあかん」

「尚孝。あんたは美乃里さんを甘やかしすぎや」

「お母さんは自分が正しいと思ってるんかもしれへんけど、他の人かて他の人なりの正しさがあるんや」

言い返した。

「そうか。あんたらが正しいなら、あんたらで好きにし」

⑥ 父が精一杯穏やかに

多鶴子は言い捨てる。食堂を出て行った。母はまだしくしく泣いている。父は大きなため息をついて食卓を見下ろした。多鶴子が用意した御飯、味噌汁、漬物、海苔が並んでいる。

「僕はやっぱりパンが食べたいなあ。美味しい紅茶を淹れてな」

「そうやよねえ。だって、尚孝さんはパンと紅茶が大好きやのに」

⑦ 途端に母が顔を上げ、嬉しそうな表情をした。

⑧ 銀花は黙っていた。父と母の言うことはわかる。だが、多鶴子の気持ちもわかる。本当は心の底で思っている。正しいのは多鶴子だ。でも、口には出せない。

「もうええよ。さつさと食べよ」

桜子がうんざりした顔で不味そうに食べはじめた。

(遠田潤子『銀花の蔵』)

① 当主……一家をまとめる主人。

② 大原……醤油蔵で長年働いている職人。

③ 櫛棒……醤油をつくる時、諸味などをかき混ぜるのに用いる長い棒。

④ 諸味……醤油をつくる途中で、原材料を混ぜ合わせて発酵させたもの。

⑤ 得意先……日ごろからつきあいの深い取引先。

⑥ 帳簿……商売で起こる取引の内容を記録する書類。

⑦ 座敷童の神様……銀花は父から、奈良の実家の柿の木に座敷童が現れるという言い伝えを聞いていた。

⑧ 蔵人……蔵で働く人。

⑨ 桜子……多鶴子の娘で銀花の叔母に当たるが、年齢は銀花の一歳上の小学生である。

⑩ 仏頂面……不機嫌そうな顔。

⑪ 懷石料理……日本料理店で見られるような上品な料理。

(一) — ① 「本気で返すのが怖い」とあるが、このときの銀花の考えを説明したものとして最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 銀花が父の冗談を面白がって話を合わせていくうちに、父が醤油造りをやめて本気で絵描きになると言い出してしまふのではないかと考えている。

イ 銀花が父の本心を聞き出していくことで、醤油造りの仕事に身をささげることが決意した父の覚悟が再びゆらいでしまふのではないかと考えている。

ウ 銀花が考えの甘さを指摘してしまえば、泣き言を言いながらも醤油造りの仕事に取り組んでいる父の努力を否定することになるのではないかと考えている。

エ 銀花が愚痴を言う父に対して真剣に受け答えすると、醤油造りの仕事をやめたいという父の本音に向き合うことになってしまふのではないかと考えている。

(二) — ② 「醤油造り」とあるが、醤油造りをする父の様子を見た銀花の考えを説明した次の文章中の I Ⅱ III に入る適当なことばを、指定された字数に従って、それぞれ本文中から抜き出して答えなさい。

父の働く様子を見ていると I (九字) ようにも見えるが、それでも愚痴をこぼさないで醤油造りに励んでいるのは、醤油蔵の家に生まれた父に II (八字) があることや、美乃里に対して III (八字) という思いがあるためだと考えている。

(三) — ③ 「胸が痛くなった」とあるが、銀花がそう感じるのはなぜか。三十字以内で答えなさい。(句読点は一字と数える)

(四) — ④ 「母と多鶴子はまるで違っていた」とあるが、二人の違いの説明として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 母は美味しいことが第一だと思つて、長い時間をかけて高価な食材を使って料理を作るのに対して、多鶴子は食べた人の腹を満たすことを第一に考えて、味のことなど考えず大量の料理を短時間で作ってきた。

イ 母は目新しいことが第一だと思つて、時間と手間をかけてみんなが今まで食べたことのないような料理を作るのに対して、多鶴子は伝統を第一に考えて、醤油蔵で長い間作られてきた味を受け継いで料理を作ってきた。

ウ 母は家族のことを第一に思つて、材料の値段などまったく気にせず毎日長い時間をかけて美味しい料理を作るのに対して、多鶴子は蔵人のことを第一に考えて、蔵人が美味しいと思うような料理を作ってきた。

エ 母は父のことを第一に思つて、時間も費用もまったく意識することなく父が喜ぶような料理を作るのに対して、多鶴子は蔵のことを第一に考えて、働く人を短い時間で満足させるような料理を作ってきた。

(五) — ⑤ 「醤油蔵がパンなんか食べてどうするんやよ」とあるが、このときの多鶴子の説明として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 自分の食生活に合わない料理を平然と出し続ける美乃里の無神経さに腹が立ち、自分が軽んじられていると感じて怒りを覚えて覚えている。

イ それとなく注意はしたものの、醤油蔵の生活に馴染まない料理を作り続ける美乃里に対して我慢の限界が来て、怒りをあらわにしている。

ウ 美乃里の料理は栄養面に問題があり、醤油蔵で働く人間に対する敬意が足りないと怒りを感じ、美乃里を叱らねばならないと考えている。

エ しばらくのあいだは美乃里に家の料理を任せていたが、美乃里の料理ばかりをほめる家族に怒りを覚え、まわりに当たり散らしている。

(六) (1) (3) (4) に入ることはとして最も適当なものを次から選び、それぞれ記号を○で囲みなさい。(同じ記号を二度以上選ばないこと)

ア いらいら    イ しゅん    ウ ぴしり    エ ふらふら    オ めめめそ

(七)——⑥「父が精一杯穏やかに言い返した」とあるが、このときの父の説明として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 多鶴子の言葉に対して反論したいという気持ちはあるのだが、多鶴子には反論しても聞き入れられないということはずでにわかつていたので、多鶴子の怒りをこれ以上あおらないためには無視するのがよいと考えている。

イ 自分の正しさを確信して美乃里に対して感情的に怒りをぶつける多鶴子を前にして、泣くことしかできない美乃里を守るため、事態がこれ以上ひどくならないように気をつかいつつ、自分の意見も伝えようと考えている。

ウ 古くから家を切り盛りしてきた多鶴子と嫁入りしてきたばかりの美乃里の間には対話など成り立つはずがないと考えているので、美乃里のかわりに自分が前に出て多鶴子に反論するのがよいだろうと考えている。

エ 立场上、美乃里のやり方が正しいと言いたいところではあるが、美乃里のやり方が醤油蔵にあわないことは明らかだとも思うので多鶴子に対して強く出ることができず、両者を立てるような言い方しかできないと考えている。

(八)——⑦「嬉しそうな表情をした」とあるが、このときの美乃里の説明として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 多鶴子に理不尽に怒鳴られ、どうするべきかわからず絶望していたが、尚孝が間に入ってくれたことが助けとなり、ささやかな希望を見いだしている。

イ 多鶴子の考えは理解しながらも、頑固な言い方に反発を覚えて素直に認められずにいるが、とにかく他の家族の前では明るくふるまおうとしている。

ウ 多鶴子に激しく責め立てられて、どうすることもできずにいたが、自分の味方をしてくれる尚孝の言葉を聞き、一転して気を取り直している。

エ 多鶴子に厳しく叱られたことで、これまでの自分の身勝手さを反省して落ち込んでいたが、それでも優しく接してくれる家族に感謝している。



(九) — ⑧ 「銀花は黙っていた」とあるが、このときの銀花の考えを説明した次の一文の I ・ II に入る適当なこ  
とばを、指定された字数に従って、それぞれ本文中から抜き出して答えなさい。

怒る多鶴子に対して I (九字) に目を向けるべきだという父の考えは理解できるが、母の様子を見てみると、母  
を II (六字) であるという多鶴子の意見の方が的を射ていると感じている。

( 試 験 問 題 は 次 に 続 く )

□ 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

皆さんは、雑草を育てたことがありますか？ 雑草なら庭にいくらでも生えている……と思うかもしれませんが、そうではありません。実際に、種を播いて、水をやって、育てるのです。雑草は勝手に生えてくるものであって、雑草を育てるなんておかしいですよ。

私は雑草の研究をしています。そのため、研究材料として雑草を育てることがあります。

雑草は放っておけば育つから、雑草を育てるのは簡単だ、と思うかもしれませんが。(1)、それは大間違いです。①雑草を育てるのは、じつはなかなか難しいのです。

雑草を育てることが難しい理由は、私たちの思うようにいかないからです。何しろ、種を播いても芽が出てきません。野菜や花の種であれば、種を播いて水をやり、何日か待っていれば芽が出てきます。ところが、雑草は違います。種を播いて水をやって、いくら待っても芽が出てこないことがあるのです。

野菜や花の種は、人間が発芽に適していると考えた時期をあらかじめ想定して、改良されています。(2)、野菜や花の種は人間のいうとおりに芽が出るのです。一方、雑草は芽を出す時期は自分で決めます。人間のいうとおりには、ならないのです。

(3)、野菜や花の種であれば、一斉に芽を出してきます。ところが、雑草は芽が出たとしても時期がバラバラです。早く芽を出すものがあるかと思えば、遅れて芽を出すものもあります。忘れた頃に芽を出してくるものもあれば、それでも芽を出さずに眠り続けているものもあります。やっとなんか芽を出しても、足並みが揃っていません。

早く芽を出すせつちかもしれば、なかなか芽を出さないのんびり屋もいます。このバラバラな性格は、人間の世界では「個性」と呼ばれるものかもしれませんが。

雑草はとても「個性」が豊かです。そういえば、聞こえはいいですが、結局バラバラで扱いにくい存在です。むしろ、個性ある雑草たちは育てにくい存在でもあるのです。

それにしても、② どうして、雑草は芽を出す時期がバラバラなのでしょう。植物にとっては、早く芽を出したほうが成長するためには有利な気もするのにな、どうして雑草には、ゆっくりと芽を出すような性格のものがあるのでしょうか？

皆さんは、「オナモミ」という雑草を知っていますか。トゲトゲした実が服にくっつくので「くっつき虫」という別名もあります。子どもの頃に、実を投げ合って遊んだ人もいるかもしれません。オナモミの実は知っていても、この実の中を見たことのある人は少ないのではないのでしょうか。オナモミの実の中には、やや長い種子とやや短い種子の二つの種子が入っています。二つの種子のうち、長い種子はすぐに芽を出すせつかち屋さんです。一方の短い種子は、なかなか芽を出さないのんびり屋さんです。オナモミの実は、性格の異なる二つの種子を持っているのです。

(4) このせつかち屋の種子とのんびり屋の種子は、どちらがより優れているのでしょうか。そんなこと、わかりません。早く芽を出したほうが良いのか、遅く芽を出したほうが良いのかは、場合によって変わります。「善は急げ」というとおり、早く芽を出したほうが良い場合もあります。しかし、すぐに芽を出しても、そのときの環境がオナモミの生育に適しているとは限りません。「急いで仕事をし損じる」というとおり、遅く芽を出したほうが良い場合もあります。だから、オナモミは性格の異なる二つの種子を用意しているのです。

雑草の種子の中に早く芽を出すものがあつたり、なかなか芽を出さないものがあつたりするのも、同じ理由です。早いほうがよいのか、遅いほうがよいのか、比べることに何の意味もありません。オナモミにとっては、どちらもあることが大切なのです。

芽を出すことが早かつたり遅かつたりすることは、雑草にとっては、優劣ではありません。雑草にとって、それは個性なのです。

しかし、早く芽を出すものがあつたり、遅く芽を出すものがあつたりすると、いろいろと不都合もありそうです。芽を出す時期は揃っているほうが良いような気がします。

バラバラな個性って本当に必要なのでしょうか？バラバラな性質のことを「遺伝的多様性」といいます。個性とは「遺伝的多様性」のことです。多様性とは「バラバラ」なことです。しかし、どうしてバラバラであることが良いのでしょうか。

③ 皆さんは、学校で答えのある問題を解いています。問題には正解があり、それ以外は間違いです。ところが自然界には、答えのないことのほうが多いのです。たとえば、先に紹介したオナモミに代表されるように、雑草にとっては、早く芽を出したほうがいいのか、遅く芽を出したほうがいいのか、答えはありません。早いほうがいいときがあるかもしれませんし、じつくりと芽を出したほうがいいのかもありません。環境が変われば、どちらが良いかは変わります。へ I へどちらが良

いという答えがないのですから、「どちらもある」というのが、雑草にとつては正しい答えになります。だから、雑草はバラバラでありたがるのです。どちらが、優れているとか、どちらが劣っているという優劣はありません。むしろ、バラバラであることが強みです。そして、すべての生物は「遺伝的多様性」を持っているのです。

じつは人間の世界も、答えがあるようで、ないことのほうが多いのです。本当は何が正しくて、何が優れているかなんてわからないのです。「もつと早くやりなさい」とスピードを評価してみたかと思うと、「もつとていねいにやりなさい」とゆっくりやることを褒めだしたりします。人間の大人たちは答えを知っているようなフリをしています。そして、優劣をつけてわかったようなフリをして、「これは良い」とか、「それはダメだ」と言っています。

しかし、何が優れているかなんて、本当は知りません。いや、本当は、どれが優れているということはないのです。へ II へ それを知っているからオナモミは、二つの種子を持っているのです。

しかし、不思議なことがあります。先に書いたように、自然界では多様性が大切にされます。へ III へ それなのに、タンポポの花はどれもほとんど黄色です。紫色や赤い色をしたタンポポを見かけることはありません。タンポポの花の色に個性はありません。④ これはどうしてなのでしょう。

タンポポは、主にアブの仲間を呼び寄せて花粉を運んでもらいます。アブの仲間は黄色い花に来やすい性質があります。そのため、タンポポの花の色は黄色がベストなのです。黄色が一番いいと決まっているから、タンポポはどれも黄色なのです。しかし、タンポポの株の大きさはバラバラです。大きなタンポポもあれば、小さなタンポポもあります。葉っぱの形もさまざまです。ギザギザに深く切れ込んだ葉っぱのものもあれば、切れ込みのない葉っぱのものもあります。へ IV へ 葉っぱの形も、どれが良いという正解はありません。そのため、タンポポの大きさや葉っぱの形は個性的なのです。

X

(稲垣栄洋『はずれ者が進化をつくる 生き物をめぐる個性の秘密』)

(一) (1) (4) に入ることばとして最も適当なものを次から選び、それぞれ記号を○で囲みなさい。(同じ記号を二度以上選ばないこと)

ア それでは イ また ウ そのため エ ところが

(二) — ①「雑草を育てるのは、じつはなかなか難しいのです」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 雑草はどうしても発芽の時期や成長のペースが遅いため、想定した時期に発芽する野菜や花と比べて、人間の思い通りに育てることができないから。

イ 雑草は発芽さえすれば、その後の生育をそろえることも可能だが、発芽させること自体が難しいうえ、芽を出さないままの種も多いため、効率的に育てられないから。

ウ 雑草は野菜や花と違い、種をまいてもなかなか芽が出ないことがあるなど、発芽の時期がまちまちでそろっておらず、全体をまとめて世話していくのに適していないから。

エ 雑草は種をまいても、水をやる前から芽を出すものや水をやってもなかなか芽を出さないものがあり、どうしても成長に差が出て均一なものにならないから。

(三) — ②「どうして、雑草は芽を出す時期がバラバラなのでしょうか」とあるが、筆者はその理由をどのように考えているか。オナモミを例にその理由を五〇字以内で説明しなさい。(句読点は一字と数える)

四——③「皆さんは、学校で答えのある問題を解いています。問題には正解があり、それ以外は間違いです」とあるが、この一文は文章中でどのような働きをしているか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 直前の、遺伝的に多様であることが雑草にとってどのような利点があるかという問いを受けつつ、人間が教育によって問題を解決する能力を手に入れたことを示して、後に続く段落の、雑草と人間にとっての正しさはそれぞれ異なるが、実はどちらも間違っていないという主張に説得力を持たせる働き。

イ 直前の、遺伝的に多様であることが雑草にとってどのような良いところがあるのかという問いを受けつつ、人間が問題解決のためにただ一つの正解を求めがちなことを示して、後に続く段落の、多様性による問題解決の方が多くの物事を解決でき、人間の出す正解よりも優れているという主張に説得力を持たせる働き。

ウ 直前の、遺伝的に多様であることが雑草にはどれほど意味があるのかという問いを受けつつ、人間が互たがによく似た正解を求めがちなことを示して、後に続く段落の、雑草の問題解決と人間の問題解決とが、結局のところ意外なほど同じ結果をもたらすことが多いという主張に説得力を持たせる働き。

エ 直前の、遺伝的に多様であることがなぜ取り柄えらになるのかという問いを受けつつ、雑草とは異なり学校でただ一つの正解を学ぶという人間の解決法を示して、後に続く段落の、多様であることが雑草の場合にだけ正しいのではなく、実人間の世界でも答えは一つとは限らないのだという主張に説得力を持たせる働き。

五——④「これはどうしてなのでしょうか」とあるが、筆者の考える答えとして最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 自然界においては黄色い花である方が様々な種類の虫を最も集めやすく、あえてタンポポが個性を表す必要がないから。

イ タンポポは株の大きさの大小や葉の形の多様さで個性を十分に持っているので、それ以上の個性が現れてこないから。

ウ 黄色より虫に花粉はしやくを運んでもらいやすい色があったとしても、進化の過程でタンポポには見られない色だったから。

エ タンポポが繁殖はんしよくするためには黄色い花であることが最適であり、あえて花びらの色の特徴とくちゆうを増やす必要はないから。

六 次の一文は本文から抜き出したものである。この文をもどすのに最も適当な場所をへⅠへⅡへⅢへⅣへから選び、記号を○で囲みなさい。

どんな大きさが良いかは環境によって変わります。

(七) X には全体のまとめの段落が入る。最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 個性は当たり前のようにあるわけではありません。個性は生物が生き残るために作り出した戦略です。個性があるという  
こと、つまりはなぜバラバラであるかといえ、そこに意味があるからなのです。

イ 個性は当たり前のようにはありません。個性は進化以前に生物にもたらされた贈り物です。人間は進化とは  
無関係に個性が生き物にもたらされた意味を考えて生きていく必要があるのです。

ウ 個性は当たり前のようにはありません。中には個性を獲得できなかった生物もいます。個性を手に入れた人  
間が他の生物の個性を伸ばしていく手助けをすることは、意味深い行為だといえます。

エ 個性は当たり前のようにはありません。生物の性質の中には、個性が認められない要素もあります。そこに  
どう個性を見いだしていくか、その点に人間が存在する意味があるといえます。

【三】 次の(1)～(10)の——を引いたカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) タイリンの花を咲かせる。
- (2) ケイジヨウ記憶合金。
- (3) コウトウでお伝えします。
- (4) 魚をゾンブンに食べる。
- (5) 亡くなった祖母のことをカイソウする。
- (6) 母のテセイのケーキで誕生日を祝う。
- (7) タダちに武器を捨てて出てきなさい。
- (8) 昔はワカゲのいたりで友達とよくけんかをした。
- (9) これはマサに人類の勝利だ。
- (10) 料理がサめてしまった。

【四】 次の(1)～(5)のことわざの( )に入れることばを後の【語句】ア～カから選び、それぞれ記号を○で囲みなさい。また、そのことわざの意味を後の【意味】1～6から選び、それぞれ記号を○で囲みなさい。(同じ記号を二度以上選ばないこと)

- (1) ( ) のせいくらべ
- (2) 類は( )をよぶ
- (3) 帯に短し( )に長し
- (4) 枯れ木も( )のにぎわい
- (5) ( )をたたいて渡る

【語句】ア 川 イ 友 ウ たすき エ どんぐり オ 石橋 カ 山



【意味】 1 中途半端ちゆうはんぱんで役に立たないこと。

2 どれも同じくらいであること。

3 十分に用心すること。

4 つまらないものでも、無いよりはある方がよいこと。

5 似たものどうしが、自然と集まること。

6 その場になって、あわてて準備をすること。

### 【五】

次の(1)～(5)の各文の—— aと~~~~ bの関係と同じ関係のものを後のア～オから選び、それぞれ記号を○で囲みなさい。  
(同じ記号を二度以上選ばないこと)

(1) 彼aが外国aに行つてみたいと、b言うのを私はとなりで聞いていた。

(2) 母の誕生日には、父がa花と、bケーキを用意するのが定番だ。

(3) a有名な現代アートの、b作家が来週この町に来るらしい。

(4) どこまでも遠く、飛行機は空の向こうへと、a飛んで、bいく。

(5) 季節が秋から冬へと、aすっかり、b変わったことを肌はだで感じる。

ア 弟はドッジボールで、aじょうずにボールを、bよけることができる。

イ 夏休みに、a私の、b書いた読書感想文がクラスで一番になった。

ウ 友達と、a入つて、bみたお店でおそろいのキーホルダーを買う。

エ 外に出ると、a暖かい、b日差しが私たちをつつみこんだ。

オ お父さんが買つてくれた本は、a分厚くて、bつまらなそうだった。

一

(九) I	(七) ア イ ウ エ	(六) 1 ア イ ウ エ オ	(四) ア イ ウ エ	(三)	(二) II I	(一) ア イ ウ エ
	(八) ア イ ウ エ	2 ア イ ウ エ オ	(五) ア イ ウ エ			
		3 ア イ ウ エ オ			III	
II		4 ア イ ウ エ オ				
		ア イ ウ エ オ				

二

(四) ア イ ウ エ	(三)	(一) 1 ア イ ウ エ
(五) ア イ ウ エ		2 ア イ ウ エ
(六) I II III IV		3 ア イ ウ エ
(七) ア イ ウ エ		4 ア イ ウ エ
		(二) ア イ ウ エ

三

(6)	(1)
(7)	(2)
(8)	(3)
(9)	(4)
(10)	(5)

四

(5)	(4)	(3)	(2)	(1)
語句	語句	語句	語句	語句
ア	ア	ア	ア	ア
イ	イ	イ	イ	イ
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ
エ	エ	エ	エ	エ
オ	オ	オ	オ	オ
カ	カ	カ	カ	カ
意味	意味	意味	意味	意味
1	1	1	1	1
2	2	2	2	2
3	3	3	3	3
4	4	4	4	4
5	5	5	5	5
6	6	6	6	6

五

(4)	(1)
ア	ア
イ	イ
ウ	ウ
エ	エ
オ	オ
(5)	(2)
ア	ア
イ	イ
ウ	ウ
エ	エ
オ	オ
	(3)
	ア
	イ
	ウ
	エ
	オ